

「番匠西遊記」

～ドイツ紀行～

【3月31日】

トランクには、かな、砥石、ノコ、等の大工道具。それに加えて板金の道具と建具調節の道具も詰め込んだ。今回は、大工だけではなく他の仕事もこなさなければならない。

「忘れたから一寸取りに帰って・・・。」とは行かない。備えは万全だ。しかし、空港で出鼻を挫かれる。トランクが重すぎたのだ。20 kgの制限重量に対して道具満載のトラン

クは、なんと 60 kg！1 kg 40 ドルの換算で 17 万円も反則金を取られた！初めからこれでは、先が思いやられるが、やってしまった事は仕方がない。気持ちを切り換えて『まちなみ会』会長の山浦さんと二人、10:30 成田発のスイスエアーラインでスイスのチューリッヒに向かう。目的地のバートクロツィンゲン市（以後BC市と記載）は、ドイツといってもスイスとの国境にあるため、チューリッヒに降りるのが近道なのだそうだ。チューリッヒには、その日の午後4時過ぎに到着。しかし、時差が6時間あるので、実質は12時間超のハードな空の旅だった。“エコノミー症候群”の事は知っていたが、確かに同じ姿勢は体に良くない。セルフの飲み物を取りに行ったりして、なるべく通路を歩くようにした。旅慣れた人は、隣の席の人に気兼ねしなくても良いように通路側の席を利用するそうだ。チューリッヒ空港には、BC市役所国際観光課長のヒンデレル・ローランドさんがマイカーで迎えに来てくれていた。途中、国境の検問があったが、何を調べられる事も無く車に乗ったままスムーズに通り過ぎる。空港から1時間40分、のどかな丘陵地を進み、車はヴィタ・クラシカの隣の『エデンホテル』に到着した。予定ではホームステイと言う事だったが、結局このエデンホテルが帰国までの宿舎となった。

12mのコンテナに詰め2月25日に日本から船便で送った資材は、4月3日に到着の予定だ。運送をお願いしたのは、“世界の日通”。この時は何の不安もなかった。



【4月1日】

朝からヴィタ・クラシカの職員と打ち合わせ。2日に現場の状況を把握する事にしていたので、午後はオフだ。ホテルでくつろいで居たところ、ヴィタ・クラシカの館長さんが「隣町のフライブルクへ、夕食を食べに行こう。」と誘ってくれた。フライブル

クへは各駅停車の電車で 30 分弱といった距離だ。館長が連れて行ってくれたのは、今や世界中で大人気の『スシ BAR』だった。館長の気遣いに感謝する。しかし店員は、みんな東南アジア系の人たち。“にぎり”は普通だったが、巻物の中身が何だったのかは、最後まで判らずじまいだった。“あがり”（お茶）も有料で、味噌汁は・・・期待薄なので注文しなかった。「フライブルクは隣町ですが、電車に乗らないと来られません。あなた方、二人だけでは、ちょっと無理でしょう。」帰り道、館長に言われた。

【2 日】

朝から現場に出る。コンクリの基礎は施されていたが、他は何も手付かずの状態だ。総ては、3 日に資材が届いてからだ。始まったばかりのホテル住まいで驚いたのは、水。ペットボトルの炭酸水が、3.5 ユーロ、1 ユーロ 170 円だから 600 円もするのだ！これには参った。しかし後に、町で 1 ユーロしない水を発見。しかもペットボトルを返すと 20 セントキャッシュバックされるのだ。さすがリサイクルの国ドイツ。タバコは一箱 680 円。しかも 17 本しか入っていない。愛煙家には厳しい。幸い日本から 1 カートン持って来ていたので助かった。後から来る人に補充分を持って来て貰う事にする。

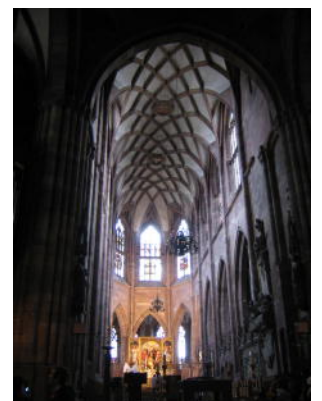


【3 日】

資材は届かなかった。ドイツの日通に問い合わせたところ、「到着は、5 日になります。」との返事。待つしかない。山浦さんと二人、ホテルでゴロゴロしたり、散歩をしたりして時間を潰した。散歩コースには、クア・パークの遊歩道は最高だ。空気が乾燥しているので、雨が降ってもジメジメ感がない。丁度、春の植物が見頃だった。

【4 日】

「榎木野さん、行くか？」「よしっ、行くばい！」意を決して山浦さんと二人だけでフライブルクへ出かけた。初日に館長さんに言われた言葉が引っ掛かっていたのだ。夜にしか見ていなかった大聖堂を観て、まちを散策して帰ってきた。1 回目に行ったときは、電車で 30 分近く掛かったが、何のことはない快速電車で 15 分で着いたのには拍子抜けした。何れにしても、二人ともこれで溜飲を下げた。夜は、ローランドさんが企画してくれたホームパーティーに参加。場所は、少し前まで B C 市にある介護施設の館長をしていたミュラーさ



んの自宅だ。ここで西岡さんを紹介される。西岡さんは、フルネーム(西岡智子シューマッハ)というBC市在住のソプラノ歌手で、日本語の通訳もしている方だ。加えてフライブルク大聖堂の合唱隊の先生もしており、大聖堂の中には、自分の教室とオフィスを持っている。御主人のゲオルクさんは、以前はドイツ大統領専用機のチーフパーサーをしていたそうだ。現在はマッチやライターのメーカーに勤めているという。(御主人からは帰国するときに記念にマッチと携帯用灰皿を頂いた。ドイツの人はライターよりマッチをよく使っていた。たばこに火を付けるのも使い捨てライターは、ほとんど見なかった。マッチが主流だ。おそらくエコロジーに基づいた考えからだろう。)



【5日】

またしてもコンテナは届かなかった。
日通は「到着は、7日になりました。」と返答。

【7日】

第1次の応援部隊として、大工の本田さんと建築士会の田島さん、佐藤さんが到着した。だが、コンテナは届かなかった。日通は「9日には到着します。」と。もう3回も変更になっている。にわかには、信じがたい。

【8日】

3人の歓迎会をかねてデザイナーのミハエルさんがフライブルクを案内してくれた。この日、ミハエルさんが連れて行ってくれた寿司屋は、日本人の経営。従業員も全員日本人。寿司も美味かった。やはり寿司屋は日本人でなけりゃ。食事の後マーケットでウインドウショッピングを楽しんだ。その中の一軒の店に日本刀が飾ってあった。本物だと店の人は言っていた。もう一軒、衣料品店でも何でもないので、浴衣を飾っている店があった。しかし、着付けは完全に間違っていた。

【9日】

案の定、荷物は届かなかった。「おかしい！あまりにも遅すぎる！」直ちにまちなみ会に連絡し、日通に問い合わせてもらったところ、荷揚げ時に必要な書類の一部が不備だと言うではないか！そんな事は、出国時に判っていたはず。しかも今日まで繰り返されたあの返答は、何を根拠にしていたのか。腹が立つが、今は、資材を運び込むのが先だ。まちなみ会と、BC市から厳しく追及して貰う。夜は、設計士



のフィリップ・ルーホさんの家でホームパーティー。ルーホさんの家は、西岡さんの家の近くにある。みんなでお邪魔したが、参加者はフレンドリーな方達で、楽しいひとときを過ごした。

【11 日】

資材が届かないのではどうしようもない。散歩もごろ寝も飽きた。そこで、気分転換に 5 人でハイデルベルクに行こうと言う事になった。ハイデルベルク (Heidelberg) は、フライブルクのずっと先にある人口 15 万人の大都市だ。ハイデルベルクまでの片道切符を B C 駅で購入する三十数ユーロ。そう安くはない。取りあえずフライブルクで降りる。問題は、ここからだ。ハイデルベルクへ行く電車が判らない。5 人、ああだこうだとフライブルク駅を彷徨っていたら、一人の若者が救いの手を差し伸べてくれた。わざわざインフォメーションまで行ってマップ付きの時刻表をもらって来てくれたのだ。それを元に 5 人はチケット売場の前に円陣を組み、またも会議を開く。その時だ、「あらっ、こんにちは。」聞き覚えのある日本語が耳に飛び込んできた。振り向くと、こちらへ歩み寄って来る西岡さんの姿があった。「何してるんですか？」西岡さんに尋ねると、「仕事に行くところなんです。」と言う。いつもなら一つ前の電車で通勤するところだが、この日は偶々病院に行く用事があったため、一つ電車を遅らせたのだという。「あなた方こそ何してるんですか？」今度はこちらが尋ねられる番だ。このチャンスを逃す手はない。奇跡的に現れた救いの女神に窮状を説明した。「ハイデルベルクに行きたいんですけど、イマイチ良く判らんのです。」それならと、西岡さんがインフォメーションまで行って話をしてくれた。しかし、担当の男性の対応が良くなかったのか、西岡さんは厳しい表情で駅事務所の中に消えていった。しばらくして帰ってきたが、その手には 5 名の団体キップが握られていた。そして「『遠い日本から来て観光に行きたいと言う人たちに親切にするのは当たり前じゃないの！あなたの様なインフォメーションはフライブルク市民の恥よ！』と言ってやったわ。」まだ怒りが納まらないといった風で捲し立てた。何はともあれ、西岡さんのお陰で 5 人は“団体さん”扱いとなり、普通にチケットを購入するより安く電車に乗る事が出来た。2 時間の電車の旅で辿り着いたハイデルベルクでのお目当ては、やはりお城だ。長い歴史の中、幾たびもの戦禍をくぐり抜けてきた古城は、完全な姿を留めては居なかったが、眼下に広がる赤い屋根の街並みは、第 2 次大戦の空爆を免れたことで昔の佇まいを今に残す素晴らしいものだった。

【14 日】

まちなみ会と B C 市の強い働き掛けが利いたのだろう、対応の鈍い日通もやっと腰を上げ、資材を積んだコンテナ 2 台がようやく到着した。日本を発送する前、牧竹田市長が見まもる中、試しに一度組み立てていたので、取り掛かると仕事は早いはずだ。日通の怠慢によって生じた“遅れ”を取り戻すべく早速、作業に掛かるが、途中で雨が降り出した。これから先が思いやられた。

【15 日】

ハイデルベルクの街並みを一緒に楽しんだ第1次応援部隊も、実労は14日の僅か一日。土台を敷いただけで帰って行った。

こちらに来て2週間経つが、日本食が恋しいとは思わなかった。ホテルの食事は美味かった。それもそのはず。我々が食べている夕食は、経費で賄われているが、普通に頼めば、一食3000~4000円程のコース料理だ。しかもワンパターンではなく、主菜を肉か、魚か選べる様になっている。晩酌もありだ。ワインとビール。どちらも美味しい！



【16 日】

屋根職人の大島さんと、城井君が到着した。本来、彼らは、建ち上がった建物に瓦を葺くためにやって来たのだが、それどころではない。一緒に大工仕事を手伝って貰うことになった。こちらの職人には、1人に内部を、後の2人には屋根を担当してもらう。こちらの職人は、棟上げに6人、以後は、常時3、4人が手伝ってくれた。職人と書いたが、ドイツにも大工は居る。しかし、建物は、コンクリートの基礎に煉瓦やブロックの壁が殆どで、もっぱら大工の活躍の場は、屋根。彼らは、屋根大工、『ツィンマーマン・Zimmermann』と呼ばれていた。そういえば、そんな名前の音楽家が居たような。ツィンマーマンも



ドイツでは、割とポピュラーな苗字だそうだ。仕事の連携だが、向こうもこちらでも、片言の英語で意思の疎通を図った。幸いドイツもメートル法を採用しているので、仕事に支障はなかった。ドイツ語と日本語では、会話の糸口すらなかっただろう。こちらでも近年言葉の乱れがあり、かなり英語に浸食されているらしく、そのような英語懸かったドイツ語のことを『デングリッシュ・Denglisch』と言うそうだ。



こうしてやっと進み出した建設作業だが、仕事のペースは、我々に合わせてもらった。我々は、朝7時30分に朝食。それから仕事に掛かる。向こうの人は、朝7時に仕事に掛かり途中10時に朝食をとる。それから、同じ日程。1時にヴィタ・クラシカの従業員食堂で昼食を取り、そのまま休憩なしで4時まで働いて1日が終わる。

【17 日】

この日も雨。14 日に作業に掛かってから毎日雨だ。それでも作業の手を止めることはない。こちらの大工も一緒に頑張ってくれている。屋根の垂木打ちも初めに要領を教えておけば問題なく進んだ。ただ、垂木の留め方はこちらに合わせる。

日本から 125mm の釘を持って来たが、「だめだめ、そんなのじゃ屋根が風で飛ばされるよ。」と総てビス留め。支給されたビスは、6mm×150mm の大きなものだった。貸し出された電動工具は日本で使うものよりパワーがあり、ゆっくりと回転する。大工道具も日本のものとは少し違っていたが、墨壺を使っている大工が何人か居たのには驚いた。良く見ると押し挽きの手ノコも日本製の使い捨て歯、ゼットソーだった。



【18 日】

毎日の終わりは、ゴミの分別だ。話には聞いていたが、さすがに細かい。日本ならば、木っ端、かんなくず、紙くずは、一緒の袋に入れて良いが、ドイツでは、それらは総て別扱いだ。当然ビニールは別、屋根のルーフィングは又別と、徹底していた。他にも細かく分けられている様で、とても手に負えない。現地の人にやって貰った。

【20 日】

23 日に帰る大島さんにとって唯一の日曜日。西岡夫妻も含めた B C 市の方達が我々を地元の観光に誘ってくれた。訪ねたのは、『シュタウゼ』と呼ばれる 4～6 月のこの時期だけ地元の農家が納屋を改造して開くレストラン。人気のメニューはホワイトアスパラを使った料理だ。これがまた美味しい！ホワイトアスパラがこんなに美味しいとは知らなかった。レストランのオヤジは、我々が日本から来た職人だと知ると、いたく感動して「こっちにも焼酎があるよ。」と 40° 強の果実酒（梨やさくらんぼ）を振る舞ってくれた。果実酒と甘く見ていたが、ストレートで飲むと喉にグッと来る。結構きつかったが、山浦さんは平気な顔で何杯も飲んでいて、ゲオルクさんが「果実酒の最後の一滴を手につけると手がツルツルになるよ。」と教えてくれたので、その通り手に塗り込んでみる。本当にツルツルになった。



【23 日】

上棟式を行う。屋根職人の大島さんは明日帰国する。彼が居るうちに、という事でこの日になった。ドイツでも家を建てる時には上棟式をする。そこで今回は、日本式とドイツ式の両方をやることにした。まず、日本式から。いつもの様に、祭壇を作り、祝詞をあげ、柏手を打つ。次にドイツ式。3 名の大工が、屋根に上り、なにやらドイツ語の口上を述べ、シャンパンを飲み、グラスを割った。悪魔除けの意味があるそうだ。日本のそれが厳かなのに対して、ドイツは、何とも華やかだ。こちらに来て直ぐの頃、幼稚園の上棟式に出会したが、音楽隊まで付いた盛大なものだった。



【24 日】

大島さんは帰って行った。予定では、城井君も一緒に帰れるはずだったのだが、屋根を完全に仕上げてしまうまで残ってもらう事になった。仕上げが役物の瓦では、こちらの職人には無理なのだ。

【26 日】

上棟式の模様が地元の新聞に載る。日本の家の建設は、こちらでも関心が高い。

Ein Gebet fürs japanische Teehaus

Handwerker aus der Partnerstadt Taketa/Naouri feiern mit deutschen Zimmerleuten ein Richtfest der etwa anderen Art

VON UNSEREM REDAKTEUR
MARKUS DÖNNER

BAD KROZINGEN. Mit Reiswein und Gutedel wurde auf der Baustelle im Saunaparadies der „Vita Classica“ in Bad Krozingen ein „Richtfest der etwas anderen Art“ gefeiert. Dort, neben dem bereits 1996 angelegten und vom damaligen Ministerpräsidenten Erwin Teufel eingeweihten japanischen Garten entsteht jetzt ein Ruhehaus – ganz in fernöstlicher Handwerkskunst. Das schmutzige Gebäude im Stil eines japanischen Teehauses ist nicht nur eine Ergänzung der Außenanlage, es soll zugleich Symbol der herzlichen Freundschaft und Thermenpartnerschaft der Kurstadt mit Taketa/Naouri im fernen Nippon sein.

Schon eine ganze Weile arbeiten die japanischen Zimmerleute in Bad Krozingen Hand in Hand mit ihren Berufskollegen vom Tunseler Holzbaununternehmen Späth. Offenbar kommen die Bauhandwerker miteinander ganz gut zurecht, wie sich die geladenen Gäste beim Richtfest überzeugen konnten. Baubherr ist die Kur- und Bäder GmbH. Und deren Geschäftsführer Rolf Rübensen rechnet fest damit, dass schon im Laufe des nächsten Monats das neue Ruhehaus fertig sein wird. Es sei nicht ganz einfach gewesen, die Bauwünsche den Freunden in Japan zu vermitteln. Daher sei eine Delegation zusammen mit Architekt Felix Ruch extra nach Japan gereist, um aus den Ideen brauchbare Baupläne zu entwickeln. „Was jetzt dabei herausgekommen ist, kann sich aber sehen lassen“, äußerte sich Rübensen voll und ganz zufrieden.

Noch steht erst das Skelett des neuen, 120.000 Euro teuren Ruhehauses, in dem nach der Fertigstellung auch Teezeremo-

nien abgehalten werden sollen, wie Rübensen versichert.

Vor allem Zedernholz wurde verarbeitet, jedes vorgefertigte Bauteil fand nach der Seereise wieder seinen Platz. Nägel sucht man vergebens, alles ist in alter Handwerkertradition gesteckt und gezapft. „Wir sind alle stolz, an dem Werk mitgearbeitet zu haben“, sagte Andreas Joos von der Zimmererei Späth in Anerkennung des fachlichen Könnens der Japaner.

Planer Felix Ruch stellte seinen Kollegen Kazumitsu Yamaura vor, der auf der Baustelle alles unter Kontrolle habe, selbst wenn sich die Verständigung nicht gerade einfach gestaltet. „Ohne die Mithilfe aus Japan würden wir das Gebäude in seiner Einmaligkeit so nie hinkriegen“, betonte Ruch. Auch Bürgermeisterin Sabine Pfeiffer war anlässlich von der „Innovation für Bad Krozingen“. Das neue Haus zementiere sozu-

sagen die enge Freundschaft mit Taketa/Naouri. Keine Frage, dass in das Richtfest japanisches Brauchtum einfließen sollte. Statt des Richtspruchs gab's ein Gebet in der Absicht, „böse Kräfte“ vom Haus abzuhalten. Vom Dachfirst rieselte es dann Reis und Glücksbringer in Form von japanischen Münzen. Die Zimmerleute mussten die Laute der Pläusen überhören, die auf ihre Weise das Richtfest inbrünstig mitzufeiern schienen.

Richtfest: Die japanischen und deutschen Zimmerleute stoßen auf das neue Ruhehaus im Saunaparadies der „Vita Classica“ an, das in solider Holzständerbauweise entsteht, wie Architekt Kazumitsu Yamaura (rechts oben) fachkundig erklärt. Eine aus Ton gefertigte Teufelsmaske (links unten), die am Giebel anzubringen sein wird, ist dafür gedacht, „böse Geister“ auf Distanz zu halten.

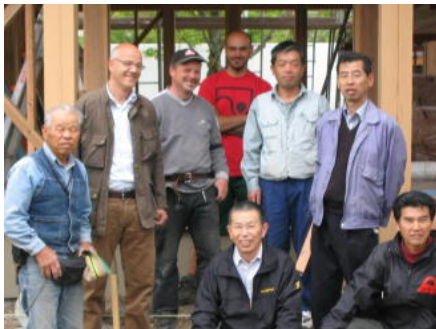
FOTOS: MARKUS DÖNNER



【27 日】

今日は日曜日、こちらは、基本的に土・日曜日に仕事はしない。最近土曜日の仕事は緩和されてきたそうだが、依然として日曜日の仕事は、法律で禁止されているのだ。しかしそれでは遅れが取り戻せない。施主に「日曜日にも仕事をしたいんですが。」とお伺いを立てたところ、あっさりとOKが出た。こちらの事情を察してくれたのだ。ありがたい。残さ

れた貴重な時間を無駄にするまいと、いつも通りガンガンやっていたら、一人の男性が、大声で何か叫びながら現場へ入ってきた。何が起こったのか唖然としてみると、通訳が「隣の温泉のお客さんです。『日曜日にうるさいぞ！作業を直ぐに止めないと警察を呼ぶぞ！』と叫んでいます。」と言う。捕まっては大変。あえなく午前で作業は中止となってしまった。施主にその事を伝え、と、「電動機具は拙かったな。大きな音を出さなければ良いんだよ。」と教えてくれた。夜、川野社長とボランティアの法華津さんが到着した。お土産は梅干し。一ヶ月振りの味は格別だった。当初の予定では、このタイミングで来れば、ほぼ完成した姿を社長たちには見せられるはずだったのだが、仕方がない。2人には第3次応援部隊になってもらい、建具の障子張りなどを担当して貰うことになった。



【5月2日】

川野社長と法華津さんが帰国。社長は、帰る直前まで建具の建て込みの事を心配していた。城井君は、2度目の延長。またしても帰る事が出来なかった。しかし3度目は無い。8日には、全員が帰国するのだ。これまで3度、仲間が帰国するのを見送ったが、“寂しい”とか“帰りたい”とは思わなかった。携帯電話を持って来たとし、通話料金も1分間180円程なので、家族といつでも話は出来た。

【4日】

日曜日。今日は音に気を付けながらそ〜っと作業をした。あの男は現れなかった。

【5日】

帰国の日まで残り僅かとなった。屋根は出来上がったが、残念ながら木工事は完成出来そうにない。そこで、毎日の作業のかたわら我々が帰ったあとの作業手順をこちらの大工の主任、ヘルムートさんに伝える作業を始める。床、壁、天井の仕上げ、建具の取り付け、等、完成までの段取りを洩れの無いように伝えなければならない。

特に建具については、川野社長も心配していたとおり、こちらには引き違いの戸というものがないので、細かく伝えておかなければならない。

【7日】

いよいよ最後の1日となった。仕事の引き継ぎも無事終わった後、まだ作業の続く現場の隣で、館長がお別れ会を開いてくれた。副市長、設計部門の責任者も駆けつけてくれた。パーティーは、2週間前の上棟式を思い出させた。

【8日】

いよいよ帰国。チューリッヒ空港までは、来た時同様ローランドさんが送ってくれる事になっている。城井君も帰国するのだが、フランクフルト空港からの搭乗のため、我々より一足先にホテルを出て行った。荷造りを終え、作業現場へ行った。現場は今日も7時から仕事が始まっていた。今日まで一緒に仕事をしたみんなにお別れを告げ後を託した。ホテルに帰り迎えの車を待っていると、設計士のフィリップ・ルーホさんたちが見送りに来てくれた。「後のことは、任せておけ。心配するな。」と言って送ってくれた。9時30分にホテルを出発。再びスイスの国境を通る。しかし、今度は勝手が違った。来た時の緩さとは一変して、荷物は小さなカバンの中まで総て調べられた。空港でも同様だった。だが、出発の時の様なへまはしない。大工道具などの荷物は、小分けして既に送っていたから何の問題もなかった。11:00 発、成田行の飛行機に搭乗。9日の 8:00 成田に到着した。腕時計は、9日の 1:00 になったままなので7時間進める。福岡行の便を待つ間、空港の中を歩いてみた。空港のアナウンス、ショップの店員の声、すれ違う人の会話、次々と耳に飛び込んで来る言葉は全部日本語だ。『帰ってきた。ああ、俺は日本人なんだ。』しみじみ思った。

【後記】

我々が帰国した後の工事の進行具合は、西岡さんが逐次、川野社長にメールと画像で知らせてくれた。
5月20日。無事、竣工したという知らせが入った。



(有)川野組 大工 樽木野 政一